

## 志喜屋孝信のキリスト教

—— 戦後復興と新沖縄建設運動との関連で ——

一 色 哲

### はじめに — 課題と方法 —

筆者はこれまで米軍の軍事占領下にあった1940年代後半の沖縄において、数名のクリスチャンが沖縄人自治組織の中核におり、戦後の地域形成に深く関与していたことを指摘してきた<sup>(1)</sup>。このようなキリスト教の政治への直接的な関与は、日本の他の地域ではほとんど見られない。しかし、それがたまたま複数のクリスチャンが地域形成に関わったという部分的で、形式上のものであったのか。それとも、米軍占領初期の沖縄におけるキリスト者の政治的関与がより包括的なものであり、キリスト教思想が戦後沖縄の自治の核心にあったのか。この議論については、なお、探究の余地があると考えてきた。

そこで、本稿では、軍事占領初期、主として1940年代後半において、沖縄人政治的リーダーであり、これまでクリスチャンとはみられてこなかった人物の思想と行動をとりあげ、そこからキリスト教と占領下における沖縄の復興と地域形成の関係を問うていくことにする。その人物は志喜屋孝信<sup>しきやこうしん</sup> (1884. 4. 19. – 1955. 1. 26.) である。彼は、米軍による沖縄の占領政策が発足した当初、1940年代後半において、米軍から沖縄のトップリーダーに「指名」された人物であった。

志喜屋は、「若いころ広島高師時代に洗礼を受けたことがある」が、「その後墮落して教会に行かなくなった」自ら述べていたといわれる<sup>(2)</sup>。確かに、本稿が対象とする時代には、どこの教会にも所属していなかった。したがって、筆者は、これまで志喜屋のことを学生時代に無教会に出入りをしていた「キリスト教関係者」としてきた<sup>(3)</sup>。しかし、その後、筆者は、志喜屋が残した日誌や手記等（その全容については第1章で詳述する）を実際に目にして、その評価を変えなければならないと感じた。それらの第一級の一次史料から読みとれることは、沖縄のトップリーダーとしての志喜屋が、占領下でも、自らの政治的理念の核心のひとつとしてキリスト教信仰を保ち続けたことであった。

さて、このような人物の思想と行動を、「キリスト教史」の文脈に位置づけていくために、本稿では「キリスト教交流史」という方法論をとる。キリスト教交流史とは、「越境」「地域」「学際」という観点からひとつの地域内や国境も越える地域間、また、国家間のキリスト教の交流の歴史を分析・記述する方法である。

まず、「越境」とは、近代以降、帝国日本の領域の拡大とそれにもともなう人口移動・労働力移動（出稼ぎ、移民、植民、留学等々）に即して本土と植民地・勢力圏<sup>(4)</sup>とのキリスト者の往還を動的にとらえることである。そして、教派・教団史、あるいは、伝道者の思想史や歴史ではない“もう一つのキリスト教史”を探究し叙述することをめざしている。例えば、「越境」の視点から占領下の沖縄をみると、以下のことがわかってくる。米占領軍は宣撫工作の一環としてキリスト教を奨励した。それにもよって、「福音派（ペンテコステ系等）」の諸教会も伝道を開始する<sup>(5)</sup>。そのような「教派」の教会と米軍基地や基地内での同系統の信徒の集まりが基地内でしばしば祈祷会や合同礼拝をしているようだ。このような例から、戦後沖縄のキリスト教伝道の構造とその特徴を垣間見ることができる。

次に、「地域」であるが、これは地域の自律的なキリスト教伝道の実態からキリスト教史を考察しようとするものである。地域は、教会にとって伝道の最前線であり、信徒の生活の基盤である。そこにさまざまな機会を通じて波状的に複数の教派・教団、あるいは、伝道者・信徒からの伝道が行われる（「個別教派・教団についての通時的歴史叙述」＝地域キリスト教史の“縦糸”）。キリスト教交流史では、それに“地域キリスト教史”の「包括的・共時的」な側面（＝地域キリスト教史の“横糸”）を併せて考察する。本稿では、戦後沖縄のキリスト者と非キリスト者等々との協働も課題になる。

最後に、上記のような視座から「地域キリスト教史」を考察するためには、隣接諸科学<sup>(6)</sup>を援用した「学際」的研究が必要となる。本稿は、これまでの占領期の歴史学や思想史の研究蓄積をふまえている。「南島キリスト教交流史」では、そこにキリスト教という要素を加えて、新しい歴史像を提示する。このように隣接諸科学との対話と研究上の補完関係の構築により、他地域でのキリスト教史研究にも新しい研究対象や史料の発掘、その地に適した方法論の提示が可能になると考えている。

## I. 志喜屋孝信の来歴と信仰

志喜屋孝信は、1884年、なかがみくんぐしかわまざり中頭郡具志川間切（のちの具志川市、現うるま市）に生まれた。そして、1904年、沖縄県立第一中学校（現沖縄県立首里高等学校）を卒業し、教員をめざして広島高等師範学校数物化学科に入学する。このとき、志喜屋は、県内唯一の奨学生だったという。先述の通り志喜屋とキリスト教の出会いはこの頃である。また、年譜を見ると、1906年には日露戦争直後の旧満州を旅行している。

1908年、師範学校卒業後、岡山県の金光中学校に奉職した。そして、同年7月には熊本県立鹿本中学校に数学の教師として赴任する。その

後、1911年に帰郷し、沖縄県立第二中学校（現沖縄県立那覇高等学校）に転任し、1924年からは校長に就任する。また、1936年には二中を辞職して、私立開南中学校（沖縄戦により廃校・消滅）を創設し、理事長兼校長に就任する。そして、そのまま終戦を迎えた。その間、1938年には3か月間をかけてハワイと北米へ視察旅行をし、現地の沖縄人コミュニティ等を訪問している。

ところが、このように戦前・戦中と一貫して教育界を歩いてきた志喜屋の人生は、沖縄戦で一変する。志喜屋は、1945年8月15日、沖縄島の石川の民間人捕虜収容所に召集された沖縄諮詢会の初代委員長となる。志喜屋の選出について、米占領軍は、当日石川収容所に集められた沖縄島の「住民代表」124名による“民主的”選挙という形式をとっていた。しかし、実質は占領軍による投票の誘導があったといわれている。

占領軍は戦争前から沖縄の有力者・指導者について徹底した人物調査をしていた。その成果は、『琉球列島に関する民事ハンドブック（Civil Affairs Handbook, Ryukyu [Loochoo] Island）』<sup>(7)</sup>に反映されていた。また、沖縄戦で人物調査を担当したハワイ日系二世の丸本正二米軍政府法務官（陸軍中尉）の証言によると、占領軍は沖縄人への聞き取り調査と那覇の元勸業銀行支店跡から発見された『沖縄人名録』をたよりに、志喜屋が「沖縄で最大の人望家」であると結論づけた<sup>(8)</sup>。

志喜屋はその後、46年4月に諮詢会が改組されて新たに発足した沖縄民政府の知事に就任し、戦後の混乱期に沖縄人自治組織のトップを5年余り務めた。そして、知事退任後の50年には、琉球大学の初代学長に就任した<sup>(9)</sup>。このように、志喜屋は、戦前・戦後の沖縄を代表する知識人の一人である。

その志喜屋孝信は諮詢会や民政府時代に書いた文書を残している。筆者は、「豚の音がえし～BEGINが結ぶ沖縄とハワイの絆～」（NHK BS

プレミアム 2012年08月17日22:00～22:59放映)というテレビ番組をきっかけに志喜屋孝信が手記を残していることをしった。そして、翌13年2月と8月、その文書群(以下、「志喜屋文書」とする)を保存されている嘉陽安昭氏(志喜屋の孫で、現在沖縄県議会事務局長)を尋ねて、それらを閲覧した。その志喜屋文書の概要は以下の通りである。

① 『諮詢委員会日誌』(1945年9月)	② 『瞑想録』(1945年9月)
③ 『諮詢委員会日誌』(1945年9月)	④ 『修養録』(1945年10月)
⑤ 『容易に学べる微積分学』(1946年)	⑥ 『諮詢会日誌』(1946年3月18日以降)
⑦ 『備忘録』(1946年7月3日以降)	⑧ 『連絡事項備忘録』(1946年9月19日以降)
⑨ 『〔宗教論ノート〕』(1947年3月)	⑩ 『備忘録』(1947年8月7日)
⑪ 『日誌』(1946年9月)	⑫ 『家庭農芸 修養自録』(1948年3月)
⑬ 『連絡事項備忘録』(1948年9月21日以降)	⑭ 『〔戦中・戦後回想録〕』(1950年4月)
⑮ 『〔修養録〕』(1950年7月)	⑯ 『日誌』(1950年11月20日以降)

※以下、上記の文書からの引用はそれぞれの番号で表記する。

このうち日誌・事務事項忘備録類(文書①, ②, ⑥, ⑧, ⑪, ⑬, ⑯)では、志喜屋が礼拝に出席した記述がある。それに加えて、沖縄人キリスト者との交流、チャプレンとのやりとり、そして、諮詢会・民政府の宗教政策等が記述されている。

また、瞑想録・修養録・備忘録(文書②, ④, ⑦, ⑩, ⑫, ⑮)には日々の雑感の合間に聖書や仏典、儒教等宗教に関する考察記事がみられる。この他、志喜屋による公式の場での挨拶の草稿もあり、志喜屋は聖書や讃美歌などを引用しながら挨拶をしていたことが分かる。

そして、全般的にみると、聖句やクリスチャン米兵・チャプレン等との交流の記載も多く見られる。筆者が最初に閲覧した『修養録』(文書④)という文書では、その冒頭では1ページ半にわたりアブラハムの系図が書かれていた。

この志喜屋文書は、最初に彼の女婿である嘉陽安春(安昭氏の父)に

受け継がれ、その一部は公開されている<sup>(10)</sup>。また、嘉陽はこれらをもとに『沖縄民政府—一つの時代の軌跡—』（久米書房、1986年）を公刊している。しかし、それらにはキリスト教や志喜屋自身の信仰についての記述はほとんどない。それゆえ、志喜屋孝信とキリスト教の関係については、これまで沖縄戦後史研究のなかでも深く探究されなかった。

それ以前に、志喜屋孝信については文書が残されているにもかかわらず、まとまった先行研究がほとんどない<sup>(11)</sup>。しかし、志喜屋の残した文書をキリスト教の文脈で読み解いていくと、占領体制の出発点での彼の内面的葛藤や思想が浮き立ってくる。これまでの沖縄戦後史研究やキリスト教史研究のなかで欠落してきた志喜屋孝信の思想史的分析と当時の地域形成におけるキリスト教に包括的な関与についての考察は可能であり、沖縄キリスト教史のみならず、戦後史研究に不可欠であるといえる。

さて、志喜屋は宗教について、「信仰の感化力は幾何学的数的速度」（文書⑩）で広まり、「宗教は心を耕す」（文書⑮）と述べている。戦中・戦後の“民族的苦難”に直面し、そこから立ち上るためには、精神的支柱として、キリスト教をはじめとする宗教と信仰が重要であると志喜屋は考えていたことがよくわかる。

文化部長で、沖縄キリスト聯盟<sup>(12)</sup>理事長も務めていた戦前からのクリスチャンであった<sup>とうやませいけん</sup>當山正堅は、本来、キリスト教以外の宗教も管轄する立場にあった。しかし、彼はキリスト教に特化して、占領軍やチャブレンの力も積極的に利用しながら戦後復興とキリスト教伝道を強力に進めていた。そのようなキリスト教のみを優遇するやり方については、諮詢会・民政府のなかからも批判があった。

それに対して、志喜屋孝信は、キリスト教伝道について、教会建設や伝道活動に便宜を図り、教会に代わって軍政府と折衝する一方で、他宗教、特に仏教についても積極的に学び、それらを住民の自治に活かそう

としている<sup>(13)</sup>。1946年2月6日に発足した沖縄キリスト聯盟も、志喜屋は、当初、仏教や天理教、カトリック等の他宗教を含めた「宗教聯盟」として組織しようと考えていた。しかし、當山などキリスト教側に押し切られたようである。ともあれ、この両者のキリスト教や他宗教に対する態度は、対照的で、興味深い。

志喜屋が戦前・戦中にしたためた文書は、残念ながら沖縄戦で焼失したので、彼が学生時代に触れたキリスト教信仰をどのように保持してきたかは定かではない。しかし、残された文書群を見る限り、“志喜屋孝信のキリスト教”は、彼が米軍占領下で自ら身命を賭して取り組んだ「新沖縄建設運動」の核心的理念のひとつとして、その重要な行動原理のひとつとなっていた。

## II. 破滅的危機のなかで倫理・道徳の確立めざして

1945年暮れから46年にかけて沖縄の住民たちは危機に瀕していた。

汚辱の年、苦難の年は過ぎ、新しい建設の年が明けた。しかし、我々を待ってゐたものは決して生やさしい戦後休息ではない。恐るべき島内危機、今や戦前の人口五十万以上を突破し、郷土外に出てゐた同胞が帰郷して人口稠密の度が限度を越へ、餓死と民衆の蜂起が面前に迫ったやうな気がする。果たしてこの危機を突破して民族再生のため新沖縄建設の基礎が築かれるかどうか指導する地位に立つ上層の人々が、この新沖縄建設に当りこれが誠実なる実行を忌避し、只管自己並にその一党の地盤を護る狂奔を開始し私利私慾を念ずるやうでは、断じて、黙視すべきではない。かゝる輩を打破し真に民衆のための環境を実現するのが諮詢会委員の急務であらねばならぬ。既得権擁護の美点にかくれて怠

業する輩も大に注意すべきものがある

中にはたかく感心すべき高潔の人々もあるが、かかる人々をかゝる人々を疑ってかゝらねばならぬ所が政治の面倒くさい所である(1946. 1. 8)<sup>(14)</sup>。

この時点で、軍用地としての収用により生活の基盤である土地を失った者も多くいた。こうした状況下で米軍の食糧配給が順次打ち切られると、食糧危機に陥る危険性に直面していた。その上、46年末までに日本本土や海外からの11万人にも及ぶ帰郷者があったという。これらの人びとのなかには、疎開先や戦地からの引き上げだけではなく、移民や出稼ぎ先で「沖縄は全滅した」という噂を聞き、身内の安否を確かめるために帰郷した人びとも相当数いた。ともあれ、当時の沖縄の生産力や職業環境、そしてなにより、食糧事情から考えて、とても維持しきれない人口を受け入れなければならない非常事態に、戦後の沖縄社会はさらされていた。

このような混沌とした状況のなか、生活苦のため、米軍やその他の物資を獲得し（「戦果あぎゃー」や「体当たり」）、密航船でそれらを食糧や生活必需品等に交換して利益を得ていた者もいた。こうした状況は、少ない物資を沖縄人どうしが互いに奪い合い、共倒れになる危機をはらんでいた。そんななか、同胞を救済し、危機を克服することが、民政府に課せられた使命であった。このように、新沖縄建設運動は戦後沖縄の切迫した状況を背景にもつ。

1945年12月23日に「拓けゆく希望座談会」というものが石川の諮詢会社会事業部の事務所で開催された<sup>(15)</sup>。そのなかで文化部の當山正堅は、「アメリカの人類正義とキリストの人道愛」に頼れば直面する難局を打開できるという楽観的な主張をしている<sup>(16)</sup>。それに対して、志喜屋は、「孤島苦」克服のための具体的な方法を提示する<sup>(17)</sup>。まず、デン



マークに倣って国民高等教育を実施し、農業教育を行う。これは、内村鑑三の教えの影響であろう。また、青年に琉球史を学ばせて、「守礼之邦」を掲げて四海に船出した「第三黄金時代」を実現させる。一方、家族で教会に出席するなどして、家庭での宗教教育を奨励している。そして、マタイ伝の7章7節<sup>(18)</sup>と10章26-27節<sup>(19)</sup>をひいて、その日の記述を締めくくっている。

志喜屋と當山の大きな違いは、主に沖縄の自立性を追究するか、米軍に依存（米軍を利用）するかであった。同時代の沖縄教会の指導者である仲里朝章もまた、歴史と教養を重視し、農業を基盤に、米軍や日本に頼らずに自立した沖縄の進路を模索していた<sup>(20)</sup>。仲里も、また、内村鑑三に私淑しており<sup>(21)</sup>、その点で志喜屋と共通している。

また、志喜屋の新沖縄建設構想は、あらゆる方向と対象に開かれていた。45年10月4日の文化部中央部会では、「今ヨリ無教育ノ教育、自己ホーキ〔放棄〕ヨリ、自己建設へ。サコク〔鎖国〕主義ヨリ人類意シキ〔意識〕昂揚ヲ。吾々ノ生存ガ、愛ノ歩ミヨリ愛ノサイボー〔細胞〕へ。愛ノ機関デアルト云フ根本概念基ツイテ、ヒヤク〔飛躍〕的創造的新沖縄ヲ建設セントス<sup>(22)</sup>」と述べている。

そんななか、1946年の1月、2月に何度か開催された宗教家合同会議では、當山らキリスト教グループが仏教に対する優越性を主張したのに対して<sup>(23)</sup>、志喜屋はあくまでも両教を中心に諸宗教が力を結集して精神的復興を目指して欲しいと訴えている<sup>(24)</sup>。こうして、沖縄の持てる力を結集していくことが、志喜屋が理想とする新沖縄建設運動であった。そのため、志喜屋は占領軍の利益誘導に沖縄の指導者側が分断されていくことは、是非とも避けなければならなかった。そして、結果的に、沖縄側の事情で実現はしなかったが、志喜屋は、あくまでも沖縄の内部の各人・各層の協力や協働を重視し、デモクラシーを占領軍から学んで実践しようとさえしている<sup>(25)</sup>。

最後に、新沖繩建設構想の核心となる思想は、公正と平等である。1948年1月には「今後、沖繩には不明や無批判や阿世便乗の人間が居ないようにしたい。正しい批判力を具へ明らかな眼を持った識者が多数居て欲しい」と述べ、天籟を怖れて神に許しを請うている<sup>(26)</sup>。

このように志喜屋が描いた新沖繩建設構想は、圧倒的支配者である米軍に依存せず、窮乏生活で我慢を強いることはしないで、自立を志向し、沖繩の将来について構想し、行動していくものであると総括できる。こうして、志喜屋は、「沖繩の歴史上最悪」の破滅的な状況下で、希望をもって前進することの重要性を説いてきた。そして、その理想の源泉のひとつに、キリスト教信仰があると思われる。

### Ⅲ. 軍政と対峙するために

沖繩諮詢会の「諮詢」という言葉は、『広辞苑』によると、「他の機関の意思を参考として問い求めること」という意味である。したがって、諮詢会・民政府には沖繩の行政に対して決定権が全くなかった<sup>(27)</sup>。それに加えて、新憲法が施行された日本本土で、新憲法に基づいて刷新された戦後民主主義の法体系は、占領下の沖繩には適用されなかった。そのため、住民たちを護るための法も制度も、占領下の沖繩には存在しなかったのである。

そんななか、本格的に占領統治がはじまると、米兵による暴力事件は多発し、住民の生命や財産は常に危険にさらされていた。また、軍作業<sup>(28)</sup>の待遇に不満を抱いた住民が抗議を行うと、その報復として米軍が供給する食糧品や日用品の価格をつり上げ、それらを販売する売店を閉鎖するなど、人権や民主主義を全く無視した圧力を、占領軍は容赦なく住民にかけてきたのであった。

このような政治体制下で、志喜屋は、望まぬこととはいえ、結果的に

軍政府に譲歩して、地域住民に対して厳しい選択を迫ることもしばしばであった<sup>(29)</sup>。このような志喜屋の態度は占領軍への追従に見え、戦後史研究者の志喜屋に対する厳しい評価につながる。しかも、志喜屋は、「米国の民主主義は宗教的正義感の社会化である<sup>(30)</sup>」や米国では「基督教によって養成せられた良心が堅固<sup>(31)</sup>」と、米国を評価すらしている。

その一方で、米国に対する激しい批判も見受けられる。例えば、「私は神に墮落した人類を再生せしめ世界全体が生まれ変わる日の早からんことを祈ります。沖縄を占領せる米兵には善良の方もあるが中には戦勝に心の置き場所を忘れて沖縄の婦女子に暴行を加え […]数字不明…<sup>(32)</sup>」とある。また、

基督教国に於て未だ国際的に実行されない宗教がこゝに彼等の軽蔑しつゝある米国の異教徒に由て国際上に実行されんとするのである。恥ぢよ。有名無実の基督教徒等よ！ かの徒らに信仰箇條を高調し、教義の純正を誇るも、敵を愛するの道を顧みざる者の如きは、未だキリストの心を知らざる者である。教義の純正を誇る神学者何者ぞ。キリストは一度もかゝる事を誇ったことはない。しかし彼は愛の爲め其の凡てを一その生命まで一献げた。彼を信ずる者は愛の人にならねばならぬ。敵を愛し得る人にならねばならぬ。然らずしては教義の穿鑿も聖書の研究も凡て無益である。愛敵の人ならば基督教でないのである。然るに今や基督教国と自称キリスト信者とは少しも之を行わない。これ自己の偽善の暴露してゐるのである<sup>(33)</sup>。

自らの周囲で次々と起こる米軍による傍若無人な行為。そして、それに対応を迫られる自らの立場から、一方では理想の米国（人）を語り、他方では占領軍を激しく非難する。この理想像を示しながら現状を批判す

る手法は、間接的にせよ現状の米軍や米国に対する痛烈な批判になるであろう。同様の手法は、仲里朝章などもとっている<sup>(34)</sup>。

このような激しい矛盾と厳しい現実とに苛まれた志喜屋は、「悪しき者に抵抗ふな。人もし汝の右の頬をうたば左をも向けよ<sup>(35)</sup>」、そして、「神は愛の神であると共に又義の神である。義なき愛は我等の願はざる所である<sup>(36)</sup>」と繰り返し述べている。また、自らの心に言い聞かせるように「汝の敵を愛せよ」との言葉が何度も、何度も、まるで呪文のように随想のなかに綴られている。このような極限に達するような志喜屋の葛藤と苦悩は、内村鑑三やガンディーの思想と行動と結び付けられて、彼のなかで無抵抗・不服従の思想へと収斂していく。

#### IV. 平和への渴望と国際社会への訴え

激しい戦火に見舞われ、異民族の支配下にはいった沖縄で、志喜屋孝信は、沖縄民政府設立記念日の挨拶と思われる文章で以下のように述べて、沖縄単独での国際社会の復帰を公式の場で述べている。

アメリカ軍政府の行為と援助指導を受けて沖縄の住民が苦難に屈せず努力を続けて来たために、今日吾々の郷土沖縄には、ようやく復興のきざしが見え一般民衆の生活が物心両面において安定に近づく希望を持てるようになって来たことは皆様とともに誠に喜びに堪えません。しかし沖縄が真に文化沖縄としての実質を備えて国際社会の一員としての実力を有し全世界の信頼を得るのには今後も尚たゆみない努力が必要であると思ひます<sup>(37)</sup>。

志喜屋孝信は、民政府の幹部たちのなかでも自立志向が強かったことは先にも指摘した。このことは、以下の文章にも表れている。

四海同胞の心さへあれば、米国及び日本は如斯沖繩の住民を苦難に陥れ（世界中でも未だ嘗ってかゝる苦難をなめさせられし民族他になきことを思考する時）じっとしては居られぬと思ふよろしく両国は思いを茲に約し、沖繩復興再建に力を尽すべきかと思ふ。神様は必ずかく両国民を反省さすべきことゝ祈り奉る。

然し我等からは両国民に御願ひすることはしない。たゞ神がかかく両国民を御導き賜はらんことを重ねて祈り奉る<sup>(38)</sup>。

このように、1946年の時点で、志喜屋は沖繩戦での惨禍と異民族統治について日米両政府に責任があるとした上で、沖繩を日米両国から相対的に自立した存在として捉えている。

民政府のなかには、松岡政保や當山のように、占領軍との良好な関係を構築し、そこから誘導した利益を住民に還元することで、沖繩の戦後復興に寄与してきた人々もいた。しかし、志喜屋は、新沖繩建設運動を契機として、沖繩人の自覚と自立をうながし、軍政府とは良好な関係を維持しつつも、沖繩単独で国際社会の一員となることを考えていた。そして、戦争や占領の責任については神に委ねる姿勢を見せて、自分たちは復興と新しい沖繩の文化の形成に邁進しようとした。

1948年7月、アムステルダムで開催予定の第一回世界キリスト教協議会世界大会に比嘉善雄をおくりだしたのもそのような国際社会への単独復帰の布石であった。当時、民政府の翻訳課長であった比嘉善雄<sup>(39)</sup>は志喜屋の側近として、多くの視察の場に行き、軍政府関係者との通訳を行っていた。この時、比嘉が国際社会で沖繩についてどのようなアピールをしたかについては残念ながら不明である。しかし、志喜屋はこの派遣に対して次のように期待を示している。

平和会議も未だ開催されず沖繩の帰属も判然としない今日ではあ

りますが聖愛・宗教に国境なく国際場裡に出席する榮譽に浴して  
ゐることは、沖縄にとり無上の喜びとするところであり、沖縄精  
神復興面に寄与する所又じんだいなるものがあると信じています。  
… (中略) …

国際檜舞台への登場は沖縄にとり今回の此の拳を以て嚆矢とする  
ものでありまして、沖縄及沖縄人が世界的・対外的に認められた  
ことを立証するものでありましょう (1948年7月26日付、沖縄民  
政府知事 志喜屋孝信発、財団法人沖縄救済更正会 天願保永宛  
書簡<sup>(40)</sup>)。

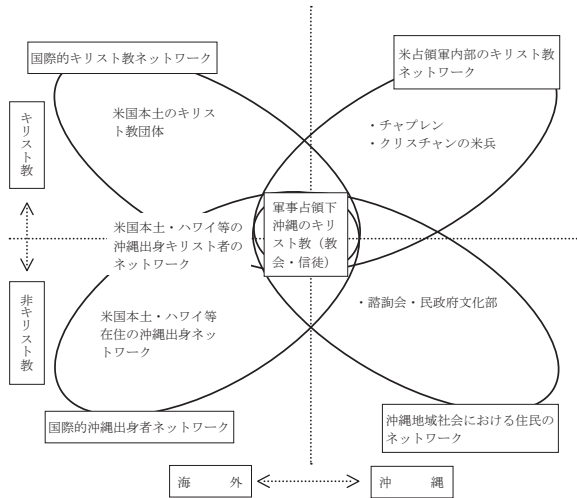
比嘉は、その後、“帰国”せず、そのまま米国に渡り、メソジスト系  
のドルー神学校 (Drew Theological Seminary) に留学する。そして、  
1950年3月にオーティス・W・ベルと共に沖縄インターボード委員会  
(Okinawa Interboard Committee, OKIB<sup>(41)</sup>) の宣教師として沖縄に  
帰ってくる。

もともと、沖縄人はハワイや南北米大陸に移民のネットワークを持っ  
ていた。そして、そこには、戦前から沖縄人キリスト者のネットワー  
クも形成されていた。こうして、ハワイや米本土にわたった沖縄人クリ  
スチャンのなかには、それなりの成功を収めて沖縄の支援を戦前・戦後と  
行った者、また、不遇で差別的な労働環境に対する改善や抗議運動の先  
頭に立つ沖縄出身牧師もいた。

戦後はそれに米軍内のクリスチャンのネットワークが加わり、右図の  
ように沖縄人キリスト者を結節点とするネットワークが形成されていた。

比嘉の国際会議出席と米国留学はこのようなネットワークを活性化さ  
せた。比嘉が派遣された1948年以降、ロスアンジェルス在住の弁護士・  
仲村権五郎<sup>(42)</sup> 等の在米沖縄人クリスチャンから志喜屋に来信が多数あ  
り、上記の沖縄救済更正会とのやりとりも活発になる。

## 志喜屋孝信のキリスト教



このように国際的な人脈を通して自立の道を模索するあり方は、かつての琉球王国の「大交易時代」を彷彿とさせる。周囲を帝国に囲まれていた〈琉球＝沖縄〉は、自らに関係する支配的国家に人脈をひろげ、一方では周辺の地域のあらゆるところに開けた関係を築いていく。そして、それらの関係性から生みだされる信頼をもとにして自らの主張を堂々と表明していく。そのような粘り強い試みがなければ、小国・琉球は独立を保ち、生き残っていくことはできなかったのである。

こうしたキリスト教ネットワークを駆使して新たに構築した関係性をたよりに、志喜屋は、軍事占領下の沖縄の行く末について、以下のように述べている。

世界の公平な観測者はおそらく望を沖縄の将来に嘱して事態の推移に注目しておくこと、信じます。沖縄の住民は昔から、平和を念じ他の大国と相争うことを好まず小国として常に永久平和であるためにはこの道を堅持すべきだと我々の祖先は我々に教へまし

たが、アメリカの民主主義の正しい理解並びに運用は一朝一夕に単に主義手段だけでは沖縄の社会の各層に浸透することを期し得られるものではありません。なほ物心両面において沖縄は未だ先進国に及ばないところが多く、殊に郷土再建の一大基礎的要素である科学の振興が捗々しく推進し得られない今日、民政府の最高機関に籍を有するわれわれはかゝる現状の革新に至大の関心をもつものであります<sup>(43)</sup>。

このように、沖縄の文化と新しく伝えられたキリスト教思想に基づく理想を掲げた新沖縄建設運動を裏打ちするのは、沖縄の内外で、共感と連帯の呼びかけであったといえる。

そして、それらは、志喜屋孝信自身のキリスト教信仰に基づく、以下のような言葉に象徴されていると思う。

兄弟を愛するのみならず他人を愛すべし。見ず識らずの他国人を愛すべし。汝等に害を加ふる敵をも愛すべしと。愛に境界なし。万人に及ばざれば止まず<sup>(44)</sup>。

喜ぶ者と共に喜び、哀む者と共に哀むべし<sup>(45)</sup>。

## おわりに

志喜屋孝信は、終戦後、思わぬかたちで米軍に指名され、戦後復興の重責を担うことになる。その際に、彼が目指したのは「新沖縄建設」であった。そこには米軍占領という制約下でありながら“破壊後の創造”に向けて、以後の沖縄のあるべき姿をかかげた志喜屋たちの理想が見えてくる。



物質的にも精神的にも荒廃した沖縄の地域社会と人々と向き合い、それらの人々を希望へと導いていくためには、宗教的な信念が不可欠であった。それが倫理や道徳の奨励にとどまり、却って人々の意識と行動を拘束し、ひたすら忍従を強いるようになると、それは、沖縄の市民にとって抑圧的にしか働かない。

しかし、志喜屋は、つねに、希望を示し続け、新しい沖縄を創ろうと努力してきたことが、彼の残した文章からは読みとれる。その背景には彼の信念があり、それを支えたのが学生時代と戦前・戦後に沖縄で出会ったキリスト者たちから獲得してきたキリスト教信仰ではなかっただろうか。

沖縄の住民たちは、沖縄戦では米軍だけではなく、「友軍」であると信じていた日本軍からも蹂躪された。そして、生き残っても、絶対的権力として沖縄に君臨した米国の占領軍からの不条理な暴力に曝された（現在も曝され続けているともいえるが…）。だからこそ、そこには、自らの訴えに耳を傾け、「共に喜び、共に哀しむ」人々の国際的な連帯が、切実に必要とされていたのだ。

最初に提示した課題に対する解決の糸口は、当時沖縄に住む人びとが直面し、現在も直面しているかも知れない「苦難」と、それにも関わらず失われなかった「希望」にあるのではないかと考えている。ひとは、抑圧や剥奪が常態化している現実から精神的・物質的に救われたいと念願するとき、希望はそれらのひとびとに生きのびて、よりよく生きる「力」となる。志喜屋孝信は、米軍占領開始と戦争による徹底的な破壊、郷土の荒廃という“民族的苦難”に直面し、そこからの解放と救済をめざして、その「力」の源をキリスト教信仰に求めたのであった。

## 注

- (1) 拙稿「軍事占領下における地域形成とキリスト教——一九四〇年代後半の沖縄を事例に——」（『日本の神学』No.49, 2010年9月）の「二 『新沖縄』建設とキリスト教の関与」（pp.35-37）。
- (2) 石川の民間人捕虜収容所内で行われたチャプレンによる礼拝のあと、志喜屋が当時占領軍の通訳をしていた比嘉善雄にこうもらったという（比嘉善雄『私の戦後秘話—迷い羊よいずこへ—』琉球文教図書, 1978年, p.129）。
- (3) 前掲拙稿, p.38。
- (4) 蘭信三等の研究によると近代以降の帝国日本は「内地」と植民地である朝鮮・台湾の「外地」、それに南洋群島や満州国などの「勢力圏」に分類されるという（蘭編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版, 2008年）。また、北海道・樺太・千島と、沖縄を含む南西諸島は「内国植民地」ともいえる。そして、それらの範囲に住む人びとは、職を求め、また、政治的圧迫を逃れ、複雑で広範囲の移動をくり返している。
- (5) ちなみに、現在沖縄地域ではプロテスタントの42の教派が教会を開設しているが、その他の単立の教会45が存在している（「キリスト教年鑑WEBサービス」（キリスト新聞社, <http://christianyearbook.net> = 有料サイト））。
- (6) 歴史神学だけではなく、歴史学、思想史、社会学、民俗学、人類学、文学、政治学、行政学などの諸科学を指す。
- (7) 米軍は、沖縄戦前の1944年に文化人類学者を動員して行った沖縄に関する徹底的調査を行った。この『民事ハンドブック』はジョージ・P・マードック（軍政将校、エール大学、人類学者）がそれらをまとめたもので、沖縄攻略軍の将校はこれを携帯していたという。
- (8) 「諮詢会設立当時の丸本氏の思い出」（『沖縄タイムス』1970年4月26日）、前掲拙稿, p.38参照のこと。
- (9) 志喜屋の功績をたたえて、琉球大学図書館には「志喜屋記念図書館」の名前が付いている。
- (10) このうち『沖縄タイムス』に掲載された嘉陽安春「志喜屋孝信遺稿随感録」（〈1〉 - 〈15〉, 1979年12月19日～80年1月13日）と『琉球新報』

に掲載された嘉陽安春編「志喜屋孝信日記」(1-33, 追録①, ②, 1980年1月30日～4月1日)は「琉球学集説 新聞切抜 120」(天野鉄夫新聞切抜帳)として沖縄県立図書館に所蔵されている。また、この抜粋の一部は、デザイナーズスペースサムライ編『黄金獅子—志喜屋孝信先生銅像建立20周年記念誌—』(志喜屋孝信先生銅像建立20周年記念事業期成会, 2008年)に転載されている。なお、嘉陽安春は志喜屋孝信の教え子であり、志喜屋の養女と結婚している。

- (11) 管見の限りでは、学術書ではないが、先述の嘉陽による『沖縄民政府』がほぼ唯一のものである。
- (12) 「沖縄キリスト聯盟」の名称は、他の文献では、「沖縄基督教連盟」、あるいは、「沖縄キリスト教連盟」などと表記されることもある。しかし、この名称には単に沖縄のキリスト教団体ではなく、キリストによって立てられ、キリストを頭とする団体であるとの想いが込められているので、ここでは一次史料に基づいて「沖縄キリスト聯盟」と表記する。
- (13) 「仏教も耶蘇教も真の宗教が分れば其の相異は習俗の上の些末なもので唯表現の違いだけである」(文書⑩)。また、文書⑨は無題の文書であるが、仏教、キリスト教、儒教についての概要を沖縄の現状に併せて実践的に整理したもので、「宗教論ノート」と名付けた。
- (14) 文書④。なお、志喜屋文書の直接的引用に際しては、旧漢字はなるべく改め、必要な句読点を補っている。以下同じ。
- (15) 参加者は志喜屋委員長、糸数昌保(水産部長)、松岡政保(幹事兼工務部長)、比嘉永元(農務部長)、當山正堅(文化部長)、大宜見朝計(公衆衛生部長)、仲宗根源和(社会事業部長)と編集部で会った(仲宗根源和『沖縄から琉球へ』月刊沖縄社, 1973年, pp.141-146)。
- (16) 「新沖縄建設理念とこれが実現意欲を、しっかりと青年男女に持たせることが第一と思う。沖縄の歴史を振り返ってみると、列国間に来て弱小諸島であったため歴史的に苦難を経てきたが、このたび幸か不幸か、大東亜戦争で日本のキハン(きずな)から離れ、アメリカの勢力下にはいったので、アメリカの人類正義とキリストの人道愛とに抱かれたことを幸いに、戦争の禍を幸に転じ、理想的な沖縄を建設することが私の新沖縄建設に対する意見である」(仲宗根源和『沖縄から琉球へ』月刊沖縄社, 1973年, p.144)。

- (17) 文書④の45年12月25日の記事。
- (18) 「求めよ然らば与えられ。求めよさらば見出さん。門を叩け さらば開かれん」。
- (19) 「蔽はれたるものに露れぬはなく、隠れたるものに知られぬは無ければなり 暗黒にて我が告ぐることを光明にて言へ。耳をあて、聴くことを屋の上にて宣べよ」。
- (20) 拙稿「米軍占領下における沖縄キリスト者の思想形成—1940年代後半の仲里朝章を中心に—」『東ASIA宗教文化研究』創刊号, 2009年7月, pp.71-80
- (21) 戦前から戦後にかけて沖縄では内村鑑三の『デンマルク国の話』を参照して、地域経済を活性化させ、自立させる方法を模索する動きがいくつも見られる。本論で挙げた以外にも、一時期灯台社や他のキリスト教団体に関心をもっていた伊江島の阿波根昌鴻も徐もひとりである。
- (22) 文書①。
- (23) 拙稿「軍事占領下における地域形成とキリスト教」p.39。なお、ここでは宗教聯盟が46年初頭の時点で消滅したと書いたが、志喜屋の文書⑬等によると、1940年代の終わりまでは組織として存続していることが確認できる。
- (24) 文書②。
- (25) 文書⑩の46年11月23日の記事。
- (26) 文書⑩の48年1月14日の記事。
- (27) 諮詢会も民政府も、軍政府から諮問を受けた事項について調査・検討し、結果を上申し、軍政府の決定を受けてそれを実行する機関であった。
- (28) 米軍占領下では民間人捕虜収容所での雑役が発端となっている。その後、米軍基地内での種々雑多な職業が加わった。基本的には占領軍政当局が制定した労働法規によるので、不当解雇なども相次いだ。
- (29) これについては、鳥山淳『沖縄／基地社会の起源と相剋 1945-1956』勁草書房, 2013年に詳しい。
- (30) 文書⑩の48年（月日不明）の記事。
- (31) 同上。
- (32) 文書②の45年9月1日の記事。

- (33) 同上。
- (34) 拙稿前掲「米軍占領下における沖縄キリスト者の思想形成」参照のこと。
- (35) 文書④の45年11月4日の記事。
- (36) 文書⑩の46年（月日不明）の記事。
- (37) 文書⑫の48年（月日不明）の記事。
- (38) 文書④の46年11月11日の記事。
- (39) 志喜屋は、もともと沖縄戦の最中に北部のオーシットイで餓死寸前になっていたところを比嘉善雄に発見され、救われた経験を持っている。
- (40) 沖縄県公文書館所蔵「志喜屋孝信からの書簡他」（「沖縄救済運動関係文書」シリーズ、資料コード [0000050126]）
- (41) アメリカ・キリスト教会協議会北米伝道局内にメソジスト教会・福音改革教会・ディサイプルス教会により設けられた沖縄伝道のための組織（前掲『教団史資料集 第3巻』pp.306-307）。
- (42) 仲村らは、1951年5月、沖縄キリスト教会が初めて本土の神学校に松田定雄、金城重明等3名の「留学生」を派遣した際に奨学金を拠出した。松田と金城は、「留学」後、沖縄に帰り、本格的な神学教育を受けた当時としては数少ない牧師となった。付言すると、このような日本本土や米国本土の神学校や教育機関への「留学」についての経済的な支援は、その後、米軍内のチャペル（基地内で米軍関係者のみで構成されている教会）が担うようになる。
- (43) 文書⑫の1949年（月日不明）の記事。
- (44) 文書⑫の1948年（月日不明）の記事。
- (45) 同上。